

ているのに対し、地域の場合は学校や他の団体とともに作り出していく色が非常に強いことが明らかになった。

そういったことから「おやじの会」が地域においておやじの役割を効果的かつ継続的に果たしていくためには、他の団体の声をくみ取って活動をすると同時に、会に過度の負担がかからないようにしなければならぬことが分かった。よって、おやじたちは活動の中で地域とともにおやじの意味合いを検討していく必要があるという結論に至った。

(主指導教員：水野 勲)

地域の起爆剤としての若者 —NPO法人共存の森ネットワークの活動と ローカルな「資源」の再発見—

渡辺 杏里

現代の日本では、特に山間部・中山間地域などにおいて、過疎化・高齢化などによる地域の経済的・社会的衰退が進んでおり、こうした地域では、村おこしや地域づくりが切実な課題となっているが、それはけっして縁辺地域だけに限定された問題ではなく、都市近郊の農山村でも共通する課題を抱える地域は少なくない。そこに共通するのは、市場経済と消費主義の浸透にともない、その土地固有の生業や暮らしの知恵が軽視される傾向である。

内部者の視点だけでは、その土地固有の価値や魅力を発見する作業に限界があるため、地域づくりの過程に外部者が何らかの形で介在し、単一地域を越えたネットワークを構築することが、内発的な地域振興の条件となると思われる。

本研究が目にするのは、この外部者との関わりがどのように作られるのか、とりわけ農山村の暮らしに縁遠い若者世代がいかにしてローカルな資源の再発見に関わるのか、という課題である。考察対象とするのは、こうした若者との協働により地域振興をめざすNPO法人のひとつである共存の森ネットワーク

である。同ネットワークが実施する「共存の森づくり関東」に注目し、千葉県市原市鶴舞山小川地域における若者の活動に焦点を当て、外部の若者がどのようにローカルな地域の資源を発見し、そこに積極的な価値を見出していくのかについて、地域住民との相互交流の活動への参与観察や、若者たちへのアンケートとインタビュー、地域住民へのインタビューを通じて明らかとした。

外部者である若者たちは活動地域に入り、名人や地域住民との相互作用を通じて、ローカルな場所の体験をする。そして、名人や地域住民たちの「知恵」や技能は、新鮮に感じ評価する若者たちのまなざしを通じて、価値あるものとして活性化していく。そしてその過程と地域住民たちからのまなざしを通じて、若者たちも、自己の再発見・再評価をする。そして、若者たちもまたローカルな場所をかけがえのないものと感じる「内部者」へとシフトしていく。しかし一方では、それが地域住民・若者の両者にジレンマをたらす背景ともなっていることが明らかとなった。

(主指導教員：熊谷圭知)

■グローバル文化学環 卒業研究■

●2010年度 (氏名とタイトルのみ掲載)

<主指導教員：石塚道子>

影山郁恵：フランスにおける出生率の回復—フランス映画を通してみる出生率回復の要因—

田平祥子：科学知を解体していくということ—シャーマニズムという伝統医療が創造されていく過程の考察—

末永沙織：向島花柳界の姿

山下沙織：「大学スポーツ」とは何か—米Purdue大学の事例を中心に—

許 露：現代日本および中国における化粧文化の違い—東京と上海を事例として—

<主指導教員：熊谷圭知>

本井典子：持続可能な地域おこしとは—新潟県村上市